

エペソ書5章15-21節 「知恵をもって生きる」

1A 賢く歩む 15-17

1B 細かく注意を払う 15

1C 目を覚ましている状態 13-14

2C 賢い生き方 15

2B 機会を十分に生かす 16-17

1C 悪い時代 16

2C 御心を悟る 17

2A 御霊に満たされる 18-20

1B 酒に酔わない 18

2B 賛美と歌 19

3B 全てのことに感謝 20

3A 互いに従い合う 21

本文

今朝は、いつもの通読の学びではなく、エペソ5章15節から21節までを見て行きたいと思います。「15 ですから、自分がどのように歩んでいるか、あなたがたは細かく注意を払いなさい。知恵のない者としてではなく、知恵のある者として、16 機会を十分に活かみなさい。悪い時代だからです。17 ですから、愚かにならないで、主のみこころが何であるかを悟りなさい。18 また、ぶどう酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。19 詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い、主に向かって心から賛美し、歌いなさい。20 いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって、父である神に感謝しなさい。21 キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。」

私たちは昨晚、中野において、アミール・ツアファルティさんによる聖書の講演会がありました。彼は、今の世界を聖書預言から眺め、御言葉が絶えず伝えている終わりの日が近づいていることを、SNSの媒体を通して伝えています。彼はイスラエル人で、イスラエル軍の中で働いていました。そしてイスラエルの旅行ガイドとしても長年のこと働いていて、今も旅行ガイドをしながら、世界各地で御言葉を伝えています。世の終わりについて考える時に、その特徴は、「悪くなっていく時代」ということです。人は、初めから墮落している、悪いことに思いを傾けるということは、ノアの時代の時に神が人類を見た時の姿でしたが、それはあまり変わっておらず、むしろますます悪くなっていきます。

そこで分かち合われた御言葉は、ローマ13章でした。「11 さらにあなたがたは、今がどのような

時であるか知っています。あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。私たちが信じたときよりも、今は救いをもっと私たちに近づいているのですから。12 夜は深まり、昼は近づいて来ました。ですから私たちは、闇のわざを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けようではありませんか。13 遊興や泥酔、淫乱や好色、争いやねたみの生活ではなく、昼らしい、品位のある生き方をしようではありませんか。14 主イエス・キリストを着なさい。欲望を満たそうと、肉に心を用いてはいけません。」今は暗闇になっていて、これから主が来られます。

そこで私たちが必要なのは何でしょうか？「知恵」です。この悪い時代において、私たちは信仰を十分に働かせて、知恵を尽くして、日々の生活を生きなければいけません。例えば、日本は治安が良いと言われるますが、他の都市に行けばスリに会うのは日常茶飯事です。自分のポケットから刷られたとしたら、もちろんそのスリは悪いものですが、いつまでも酷いことをされたと叫んでも、意味がありません。その現実は変わらないのですから、自分が人ごみの中に入ったら刷られないように工夫する必要があります。その工夫や気構えが必要ですね。これが信仰生活にも当てはまります。せっかく信仰の知識が与えられても、もし知恵を働かせないならば、その信仰は生かされず、結果的に信仰を持っていないように動いてしまっています。知識はあっても、知恵がなければ、自分の持っている信仰は無意味になってしまいます。そして終わりの日、ますます悪い時代になっている時には、私たちの生活の隅々にまで知恵を働かせて、信仰の中にきちんと立っている必要があるのです。

1A 賢く歩む 15-17

今朝は、15 節から 21 節までを見て行きますが、初めの 15-17 節までが「賢く歩んでいくこと」について見ていきます。具体的に生活の指針を正すことについて見て行きます。そして次に 18-20 節は「御霊に満たされる」ことについて見て行きます。心が放蕩へと向かってしまう私たちの傾向に対して、御霊に満たされることについての知恵を教えます。そして最後に、21 節で互いに従い合うことについて見て行きます。

1B 細かく注意を払う 15

ではまず、15-16 節です。「**15 ですから、自分がどのように歩んでいるか、あなたがたは細かく注意を払いなさい。知恵のない者としてではなく、知恵のある者として、16 機会を十分に活かみなさい。悪い時代だからです。**」ここの「細かく注意を払う」という言葉に注目してください。このギリシア語「アキリボウス」は、「細かいことにまで、完全に正確に保っていく」という意味合いがあります。自分に与えられている信仰が、いつのまにか世の流れに乗せられて歪められたり、信じている内容が実質、違うものになっていたりするかもしれません。ですから、よくよく注意して、自分の信仰を具体的に、いろいろなことに働かせていかないといけません。

私は、いつも感じています。群衆になることは簡単だけれども、弟子になることは難しいことであ

る、ということです。群衆は、距離を置いてイエス様について行き、ただイエス様の言葉を聞いていればよいだけです。そこには知識しかありません。その知識が生活の中でどのように生かされるのかというところまでは、まさか考えも及ばないのではないのでしょうか？しかし弟子たちは違います。私たちはマタイの福音書を学んでいますが、弟子たちはイエス様から何度となく聞いているのに、いざとなるとその聞いたことを自分たちの必要や生活に当てはめられていないことに気づきます。パリサイ派とサドカイ派のパン種に気をつけなさいと言われた時に、自分たちがパンを持ってくるのを忘れたとして、気が動転していました。イエス様は、満腹してありあまるほど五千人、四千人の人々にパンを給食することができたにも、関わらず、です。聖書の話聞いて、それで満足して良かったと言っているのであれば、そこには知識はあっても知恵はありません。具体的に、私たちが言葉を交わして、体を動かし、表面的なものではなく、心と心が触れあう関係を持つことなしには、弟子になることはできません。弟子になるとは、しばしば正されることも意味します。弟子たちがどれだけのこと、正されたことでしょうか。しかし、弟子のように「生活」を含めた付き合いの中に、神の言葉を当てはめなければ、私たちは賢くなれないのです。

1C 目を覚ましている状態 13-14

ここで、「**ですから**」という言葉から始まっていることに注目してください。ですから、と言っているのですから、その手前の言葉の続きになっています。「13 しかし、すべてのものは光によって明るみに引き出され、明らかにされます。14 明らかにされるものはみな光だからです。それで、こう言われています。「眠っている人よ、起きよ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストがあなたを照らされる。」とあります。霊的に眠ってしまっているところから、起き上がりなさいと呼びかけられています。イエス様が戻られる時に、十人の乙女の喩えがあって、全ての人が眠っていました。けれども、五人の愚かな乙女は油を用意していませんでした。賢い五人の乙女は用意していました。終わりの日には、いつの間にか眠ってしまうような状況の中に置かれています。信じるということは、本来こういうものなのだが、忘れられてしまっています。けれども、それでも信仰が守られるためには、「用意する」ということが知恵なのです。つまり、誰かから言われたことを受け身に行なっていくのではなく、前もって、率先して、神に言われたことを具体的に行っていくことが必要なのです。

2C 賢い生き方 15

ここに、「**知恵のない者としてではなく、知恵のある者として**」とあります。自分が今、目標としていることは何になっているのでしょうか？知恵を持っているということは、自分の人生に明確な目標があるということです。それは何でしょうか？それが、具体的に「神の国」になっているのでしょうか？神が栄光を取られる国です。神が支配される国です。キリストが全ての人の救い主になっている国です。そういった話は何度も聞いていることでしょうか、けれども果たして自分の生活の指針、その行き着くところがそうになっているのでしょうか？神の国を宣べ伝えるのは、何も牧師や伝道師のことだけではありません。自分が福音を伝えていくため、その一員になっており、明確にその部分を果た

しているのだという意識は持っているでしょうか？家族において、自分は遣わされている宣教者なのだという信仰はあるでしょうか？その目標があって、それで今の時をどのように生きればよいのか？ということが見えてきます。

もちろん、私たちは明日のことは分かりません。主の御心ならば、これこれをしようとしなさいとヤコブは手紙の中で命じています。けれども、神の国という方向に自分の霊的な方向が定まっていなかったら、いつまでも世の流れに翻弄されているだけで前に進むことはできないのです。それはまるで、目的地の分からないボートのようです。風に帆を合わせて乗ることはできるでしょう、けれどもそれが正しい方向であることが分からなかったら、スムーズに風に乗っても全く意味がありません。あるいは風に逆らっても意味がありません。目標が定まっていなかったキリスト者生活は、このように知恵がないのです。自分が神の国の一部であること、そして自分がその分を果たさなければならないことを覚えてください。それは、ご自分が一言、家族に自分がクリスチャンであることを話すことかもしれません。家族の人たちに、職場の人たちの為に祈り始める事かもしれません。そして自分はキリストの体、教会の一部として積極的に関わっていきます。主が戻って来られるのが近いのです。主のことに対して、御霊によって熱心になる必要があります。

2B 機会を十分に生かす 16-17

1C 悪い時代 16

そして「**16 機会を十分に活かさない。悪い時代だからです。**」ということですが、ここの機会は英語では「時」と訳されています。こちらの新改訳の訳のほうが意味としては正確です。機会としての時です。種蒔きの時だ、収穫の時だ、というような時に使われる時です。ですから、今この時を逃したら、収穫する機会を失ってしまうという意味が「収穫の時」にはありますね。ですから、ここで「**機会を十分に活かさない**」というのは大事な言葉なのです。

私たちには、時が来ています。終わりの時が近づいているということは、それだけ神がご自分の救いを完成させる時が近づいているということです。これまでになく速度で、神は事を進めておられます。それが困難や試練という形で来ることもあるでしょう。けれども、その困難や試練というのが、実は神に反対するのではなく、むしろご自分の救いを促進させているものかもしれないのです。もし自分の霊が眠ってしまって、そのことに気づいていないのであれば、機会を十分に活かしていないということになります。そして、自分は自分のことで忙しくしていて、けれどもその忙しさは神の国のために忙しいのではなく、無目的に忙しいので、神から与えられた時間を無駄にし、浪費していることになります。

一タラントのしもべのことを思い出してください。彼は、主人から与えられた一タラントとは、何も関係なく生きていました。土に埋めていました。機会を一切、活かしていませんでした。彼の人生で数多くの事を行っていたでしょう。けれども、神のために何かをしたことはなかったのです。忙

しい人生、生活だったけれども、それが終わりの日に顔と顔を合わせる主にあって、それが無意味なものだと判断されたらどうするのでしょうか？主人がこう言いました、「悪い、怠け者のしもべだ。(マタイ 25:26)」主に与えられた機会を活かさずに生きることは、主の前にあって悪いことなのです。「**悪い時代だからです。**」と書いていますね、悪い時代には数多くの無駄に浪費された人生が溢れています。

ところで、私たちは、純真さと聡さのどちらもが必要です。悪い時代になり、信仰は幼子のように純粹でなければいけません、悪がはびこっている中で、蛇のように聡くなければいけません。イエス様が弟子たちを福音のために遣わす時に、こう言われました。「いいですか。わたしは狼の中に羊を送り出すようにして、あなたがたを遣わします。ですから、蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい。」そして、「人々には用心しなさい。」と言われます(マタイ 10:16,17)。その人々は、神に愛された尊い存在ですが、それと同時に悪に傾き、その深いところにある闇を抱えています。一見、敬虔なように見える人もその実を否定する者が出てくると、テモテ第二 3 章でパウロがいているとおりです。

2C 御心を悟る 17

そしてパウロは、「**17 ですから、愚かにならないで、主のみこころが何であるかを悟りなさい。**」と書いています。主の御心を悟る、あるいは知っていると言った方がいいです。自分の生活の中で、また人生の目的の中で、主の御心が何であるかを悟っているでしょうか？ここで、主の御心というものを、何かどこからともなく示された思いや感覚であると思っている人があまりにも多いです。それで、御心が異教の占いのようになっていることがとても多いです。けれども、御心というのは、そういった感覚で与えられるものではなく、しっかりと賢く生きている中で、具体的に信仰を生活の中で当てはめて行く中で、何が御心で何がそうでないのかをわきまえ知ることができます。

2A 御霊に満たされる 18-20

このように、愚かにならない、賢く生きることについて見て行きました。これらは、どうやって生活の中に具体的に信仰を活かしていくのかという、「思い」に関わる部分です。次は霊や心に関わる部分と言ってよいでしょう。「御霊に満たされる」ということであります。

1B 酒に酔わない 18

「**18 また、ぶどう酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。**」

なぜ、ここでパウロが酒のことを話しているのでしょうか？これは、先に愚かにならずに、という言葉があるように、酒が愚かなことをする元になっていることは確かだからです。ここにも、「**放蕩があるからです**」とあります。けれども、興味深いことに、「**御霊に満たされなさい。**」とパウロは言

います。なぜ、御霊に満たされることと酒に酔いしれることが並べて書かれているのでしょうか？酒に酔いしれることは肉に行いであり、人を滅ぼすのに対して、御霊は命を与えます。それでも、並べて書かれているというところには、とても近い関係があり、似ているものがあるということです。

酒は人の思いと心を満たします。自分で制御する力を失います。けれども、なぜそれを飲むのかと言いますと、心に痛みがあるとか、心が疲れているとか、心を満たしたいからです。それで、はたして満たされるか？というそんなことはないのですが、けれども、それと御霊に満たされるということが近い関係にあるのです。私たちの心は呻いています。「同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。(ローマ 8:26)」心にある呻きを御霊が受け止めてくださって、それでちょうど、自分の心が辛くなってお酒に走ってしまうのと同じようにして、御霊が私たちの心を満たし、支えてくださるのです。

私たちは、よくよく注意して歩む時に、思いだけでなく心も注意しないとイケません。世の終わりはつまずきが多く、愛が冷えるとイエス様は言われました。「マタ 24:10-12 そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えます。」したがって、心を酒で満たす、あるいは他の何かで満たして愚かに動いてしまいます。けれども、そこで私たちは心を御霊によって満たされ、神から引き上げられることができます。

2B 賛美と歌 19

「19 詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い、主に向かって心から賛美し、歌いなさい。」心が守られ、御霊に満たされるための方法の一つは、賛美を歌うことです。詩とは、詩篇のことです。詩篇は読むものではなく、元々は歌うものでした。賛美は私たちが普段、目にしている賛美であり、そして霊の歌は、即興で出て来るような御霊による歌です。これによって互いに語り合うとあります。心から出て来る賛美を語り合うのです。そして主に向かって歌います。私たちは、自分の心が落胆すれば、主が行われていること、その機会を見失って愚かになってしまいます。けれども、賛美によって満たされて、主が何をされているのかが見えるようになって、主に御心をわかまえることができるようになります。

3B 全てのことに感謝 20

「20 いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって、父である神に感謝しなさい。」御霊に満たされるための次の方法は、感謝することです。いつでも、すべてのことについて感謝します。けれども、私たちはすべてのことなんか、感謝することはできません。けれども、二つのことを知っていれば感謝できます。これを、イエスの御名によって感謝することです。イエス様の名によるならば、すべてのことが神の許しの中で起こっているのです、必ず相働かせて

善とさせていただきますを知っているからです。次に、父なる神に感謝することです。他の誰かに感謝をしてもいいですが、全てのことを支配しておられる方にこそ感謝ができます。

3A 互いに従い合う 21

このようにして、御霊によって満たされることを見ました。賢く歩むことを見ました。これが世の終わり時における御心です。けれども最後に一つだけ、次の 21 節以降の勧めも少し触れたいと思います。「**21 キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。**」です。主を恐れること、人を恐れないことは、大前提です。世は私たちを憎みます。ですから、恐れを霊に満たされそうになります。けれども、主はご自身を恐れることを教えました。そして主を敬う人は、主によって立てられている人々も敬います。互いに従い合うというのは、主を恐れているからこそできることです。私たちは互いに従い合っているでしょうか？主を恐れていなければ、誰にも従えないと思ってしまう。しかし、主への恐れがあればあるほど、主によって立てられている夫、また妻に従えるようになります。子は親に従えるようになります。奴隷は主人に従えるようになります。教会の人々に対しても、兄弟姉妹でたてられている人々に従えるようになります。

こうやって私たちは、終わりの日に備えるのです。終わりの日とは困難な時です。悪い時代です。ですから、相当の注意を払って生きる必要があります。御霊に満たされてください、ただ漫然と生活を送らないでください、神の国のために生きていることを思い出してください。